

---

# SAVIOUR ~ 運命の来訪者 ~

風羽 鷹音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SAVIOUR（運命の来訪者）

### 【Nコード】

N2689S

### 【作者名】

風羽 鷹音

### 【あらすじ】

魔法や科学がごちゃ混ぜな、何処とも知れぬ世界の、何処とも知れぬ星での物語。

小さな魔導師である少女が訪れる異世界。

異世界での出会いが少女の旅に転機をもたらす。

## 第01話 白く小さな騎士（前編）

世界は複数の層に分かれそれぞれの層に星の数ほどの世界があり、それぞれの世界に文字通り星の数ほどの星が存在していた。

鼠算式に存在する世界の全てを把握す事など到底無理で、世界や星は、今この瞬間も新たに生まれそして消えていった。

それが自然な事なのか、はたまた誰かの意志が介在しているのか。真実を知る術はなく、何が真実なのか知る事もない。

しかし、それぞれの世界で、星で、確かに今を生きている生命は存在していて、その生命達にスポットを当てれば世界の真実など些事にさえ写る事もある。

そして、これは何処かの世界、何処かの星の物語。

思わず飛び込みたくなるような青々とした草原と、空を飛びたくなるような何処までも広がる青空。

そんな草原と青空の間の空間を一隻の船が航行していた。

どのような技術を用いているのか、その船は音もなく静かに草原と青空の間を進んでいた。

四角錐を対角線上に真っ二つにしたような三角錐。船の形状を簡単に現せばその様な物だった。

船の上部や下部には僅かながら砲台が設置されているが、船の上部はなにやら庭園の様に様々な花が咲き誇っていた。

そしてブリッジと思われる部分はちよつとした豪邸。

船を真下から見上げればちよつとした戦艦。真上から見上げれば空飛ぶ庭付き豪邸。なんともアンバランスな形容をしていた。

「あの丘を越えればもうシュミイル王国か・・・この一ヶ月の旅もなんの成果もなく、正直帰りたくない」

船の上部、庭園の一角で、草原の先に見える丘を眺めながら愚痴る少女が一人。

髪の色は薄い緑、若草色とでも言うべきか。瞳の色は赤く肌は透き通るように白かった。

年の頃は10代前半といったところ。

少女は苦々しげに視線の先の丘を見つめ、

「母上や兄上に、自分専属の魔導騎士ぐらい自分で見つける、などと啖呵をきって飛び出したはいいものの結果が収穫無しではな・・・母上や兄上が笑い転げる様が目に浮かぶ」

少女はそう言って自虐的な笑みを浮かべたが、笑い転げる母や兄の姿が鮮明に浮かんだのか、笑顔が引きつる。

「いつそのこと、船を反転させて、もう一ヶ月ほど旅に出るか。よし、そうしよう」

少女は手を叩き豪邸のようなブリッジに向かおうとした。

しかし、そんな少女の行く手を別の少女が塞いだ。

艶のある黒髪、顔立ちや身長から先の少女よりも少し年上である事が伺えた。

その少女は腕を組み、

「姫様、さらに学校を休むつもりですか？」

そう言っつて、先の少女を見下ろす。

姫様と呼ばれた少女は、あたふたとして、

「いや、しかしな、フレールよ。想像して見る、母上や兄上が笑い転げる様を、どうじゃ？　なんか腹立つだろ？」

フレールと呼ばれた少女はやれやれといった感じで、

「私は王家専属の魔導騎士の家系として幼い頃から女王様や王子様を見てきましたから慣れてます」

そう言っつて首を横に振った。

しかし姫は諦めず、

「いやいや、慣れるなよ。あんなものに慣れるなよ。私が誰のせいで常備薬が胃薬になったと思う？　あの二人のせいだぞ。しかもこの一ヶ月、離れて暮らしたせいか胃薬いらす。トラブルメーカーなどと言われる私のさらに上に行くトラブルメーカーだぞあの二人は」

八重歯をむき出しにして抗議する姫に対してフレールは、

「あのお二人のトラブルの対象は姫様限定ですから下々の者には特に害はないんですよね」

そう言っつて無情にも一蹴した。

その言葉に姫は両手と両膝を地面につきうなだれた。

いかんマジでいかん。姫はうなだれながらそんな事を思っていた。

青空の下、心地良いはずの風も今の姫には冷たく感じた。

何処かに私の味方はいないのか。そんな愚痴をこぼしそうになりつつも、冷静に、国に帰ったら、どう言い訳しようかと考えていた。別に孤独というわけでもない。ましてや母や兄から虐められているわけでもない。その二人は兎に角愉快な事が好きで、同じくらい姫の事が好きなのだ。

姫としても二人の愉快犯っぷりに迷惑しつつも、二人が自分の事を好き過ぎているのは理解はしている。

理解はしても疲れるものは疲れるのだ。

だから時々城を飛び出したくなるし、学生生活もわりと好きだったりする。

こちらら胃薬が常備薬になってんだから、もう少し自重してほしい。と、姫は常々思っていた。

うなだれるのにも飽きたのか姫はすくつと立ち上がる。

しかし立ち上がると同時に船を爆発とそれに伴う衝撃が襲った。その衝撃で姫とフレールは思わずよろける。

そして直後、船中にけたたましいサイレンが鳴り響いた。

「何っ？ 敵襲っ？」

フレールは咄嗟に姫を自分の方へ引き寄せ自らのマントの内へと匿い周囲を見渡す。

姫はフレールのマントの内で慌てる事も動揺する事もなく、

「シユミイル王家の船に喧嘩を売るとは大した奴なんじゃろうな。というか国境付近でよくやる。いや、むしろ国境付近だからとこちらが油断していると判断したのかの？」

「ですが、こんな身を隠す場所が何も無い所で・・・下か？」

フレールは見えるはずもないのに思わず下に視線を向ける。実際フレールの想像は正解で、草原の幾つかの箇所がめくれ上がりそこからフレールと大差ない少女達が現れ、それぞれ弾頭付きのロケット砲の様なものを頭上を行く船底に向かって放った。船底に備え付けられた機銃が次々と弾丸を吐き、迫るロケット弾を打ち落としてゆくが、全てを捌ききれず、数発が船底を直撃した。その衝撃は当然、庭園部にいる姫やフレールにも伝わっていた。

「はははっ、この船『ペースト』も私の胃のように穴が空くかもな」

「姫様なんでこんな時に暢気な事言っただけ笑ってられるんですか」

「しいて言うなら王家の器？ 余裕というやつかの」

姫はそう言うのとフレールのマントの内からでる。

そしてフレールの向こう側を指差し、

「フレール、とりあえず客の相手をしてくれると私としては助かるんだがな」

姫の言葉にフレールが振り返ると、姫の指差す先にフレールと体格が大差ない少女が三人ほど立っていた。

それぞれ背中に金属製の翼のようなものを付け、手には一振りの剣。そして少女達の表情には感情が感じられなかった。

少女達の瞳孔は細かく拡大と縮小を繰り返し姫とフレールを正確に捉える。

少女達の様を見て、姫は口の端で笑い、

「ほう、見た事のない型の『人形』じゃな。何処の国の新型かの？」

姫が関心を見せる中、フレールはマントの内、腰に下げた剣を抜き人形と対峙する。

船の下、草原では今なおロケット砲と機銃の弾丸がいきかい、庭園部ではフレールと三体の人形が対峙する中、その遙か上空、ぽっかりと白い穴が開き、その穴が徐々に広がっている事に、今は誰も気がつく事はなかった。

第01話 白く小さな騎士 (前編) (後書き)

後編後書きにて登場人物達による『お助け座談会』なるミニコーナーがあります。

## 白く小さな騎士（後編）

それは、その少女にとっては慣れたことであった。

とある世界で出会った者達と別れを告げ、白き少女は世界を渡る為の魔法を組み上げる。

そして少女は振り返ることなく、その世界から旅立った。

いったい何が目的なのか、それを知るものは、ほんの一握り。少女はただひたすらに世界から世界へと旅を繰り返していた。

横の世界から、更に横の世界へ。

傍から見れば非日常なそれも、少女にとっては日常だった。

浮遊感、そして落下。

一見すれば危険な状況も少女にとっては慣れたもの。

最も少女自身が選択したのではないが、いきなり水中とかに比べればマシなものだった。

何故なら少女は空を飛べるから。

「あれは？」

少女は落下しつつも体制を整え、眼下の光景に注目した。

剣を持った少女と、それほど体格差のない少女が三人。

そして剣を持った少女は後ろの人物を守るように立っていた。戦闘。それは理解できた。

しかし、落下途中の少女はあることに気がついた。

『人形』がいる。

それを確認した少女は落下から飛行に切り替え、一気に加速した。

「えっ？」

フレールは突然の出来事に思わず声をあげた。

その後ろで姫は「ほう」と関心の声をあげる。

突然、空から降ってきた少女が一体の人形を踏み潰し、手に持った、持ち手が中央にある剣のような物で残りの二体を一撃の下で粉砕したのだ。

そして少女はフレールや姫を一瞥すると、そのまま船から飛び降りていった。

「フレール、驚くのもわかるが、早くあの者を追え。恐らく地上の人形をつぶしに行ったぞ」

姫にそう言われ、フレールは駆け出した。

「ああ、それと可能なら後でここに連れてくるように。話がして見たい」

姫はフレールの背にそう声をかけた。

地上に降りたフレールは我が目を疑った。

圧倒的過ぎる。

少女は人形の攻撃を全てあっさりとかわして行き、その人形が少女の動きに追いつけず次々と破壊されていく。

少女の表情には何も無い。

怒りはおろか敵意すらも感じられなかった。

まるで、それが当然であるように、そうする事が自然であるかの

ように人形を破壊していく。

人形の砲火を掻い潜り一閃、人形の斬撃をかわし一閃、立ち止まることなく次から次へと、少女は人形を破壊していった。

結果として、ものの数十秒で地上の人形は一掃されていた。

すべての人形を破壊した少女は手にした武器を中央で二分割にし、それぞれが小さい箱の様な形状になると、それを腰の両側に下げた。

「ねえ、ちよつと貴方」

フレールがそう声をかけると少女が振り返る。

ショートの白い髪がゆれ、少女はフレールの方を振り向いた。

感情を感じさせない表情と深く赤い瞳におもわずフレールはたじろいだ。

「おおっ！ 来たか来たか」

庭園のような甲板で姫はそう言いながら手をたたいて喜んだ。

フレールに連れられた少女は体は姫よりも小さく、きよろきよろと周囲を見渡していた。

「これが船？」

少女がわずかにそう呟くと姫はにやりとして、

「そうっ！ シュミール王家が所有する船、名前を『ペースト』として私、シュミール王国の姫、メイール・シュミールが実質占有している」

姫、メイルはそう言って大してない胸をはるが、フレールが「占有とか威張っていう事じゃないですよ」とぼそりと呟いた。

メイルは「なんか言ったか」とフレールを睨むが、フレールは黙って首を横に振る。

「で、お前、名前はなんと言っ？」

メイルが少女にそう問うと、

「ミルア・ゼロ」

少女、ミルアはそう答えた。

メイルはうんうんと頷いて、

「ではミルアよ。おぬし、何処の所属だ？ 出身は？」

メイルはそう問うがミルアは黙って首を横に振った。

そんなミルアにフレールが怪訝な表情をするが、メイルは気にすることなく、

「ん？ 言えんのか？」

「いえ、言えないではなく私は自分の出身など知りません。ついでに知ろうとも思っただことがないです」

ミルアはそう答え、それを聞いたメイルは軽く首を傾げる。

「んん？ 妙な奴だな。まあいい。それよりミルアよ、これは大事なことなのだが、おぬし今、誰かに仕えてるか？」

メールの言葉にミルアは「はい？」と首をかしげ、フレールは「まさか」と呟いた。

ミルアは首を傾げていたが、やがて、

「いえ、一人旅なので誰かに仕えてるわけではありませんが……」

「よしよし、では、ミルアよ、おぬし私に仕えてみないか？」

メールのその言葉にミルアは「はい？」と声をあげ、フレールはやれやれとため息をついた。

メールはミルアの肩をガシツと掴み、

「ただいま、専属の護衛騎士を絶賛募集中！ 衣食住完備！ 給金もはずむぞつ！ どうじゃ？」

必死の形相のメールに対して、ミルアは眉ひとつ動かさずメールの瞳を見つめる。

わずかな沈黙のあと、ミルアが口を開く。

「私の旅には目的があります。その目的を明かすことはできませんが、その目的故にあまり長い間同じ世界にとどまることはできません」

「期間限定か……なら、それでもよい。しばらくの間、私に仕えよ」

メールの言葉にミルアは「了解です」とだけ答えた。

ミルアの答えにメールは満足げにうなづく。

やれやれ、と、いった具合のフレールだったが、ふと、あることに気がついて、

「ねえ、ミルア。あなた今『同じ世界に』って言ったわね？ それ、  
どういうこと？」

フレールの問いに、ミルアはフレールの方を向き、

「そのままの意味です。私はこの世界の住人ではないので」

ミルアの答えにフレールは「え？」と呟き、メイルは「ほう」と  
声にし、

「ミルアよ。おぬし異世界から来たのじゃな？」

メイルにそう問われ、ミルアは「はい」と頷いた。  
するとメイルは「はっはっは」と笑い、

「これは何たる奇遇か。異世界からの迷い子たる私に、異世界の騎  
士が仕えることになるとな。いや、実に愉快じゃ」

メイルの発言にミルアは軽く首をかしげる。

無論ミルアが疑問に思ったのはメイルの「異世界からの迷い子」  
という部分。

今から11年前、シュミイル城の庭で遊んでいた当時7歳だった  
王子の目の前に、黒い穴がぽっかりと空き、そこから赤ん坊が転が  
り落ちてきた。

もとより、この世界には異世界からの住人が現れることはそう珍  
しくなく、過去の文献や昔話などにも異世界の住人はよく記されて  
いた。

そして、転がり落ちてきた赤ん坊の処遇をどうしようかと、大人

たちが思案する中、王子が「妹がほしい」と言い出し、しかも勝手に「メイル」と名付けあやしだしたのだ。

当然、周囲の大人たちは困惑した。

いくらなんでも異世界からの迷い子を王家に加えるわけには、との事だったが、王子が、自分と一緒に王家にふさわしい人間になる、と言い出し、妹にすることを決して譲らなかった。

結局、後継者自体は王子がいる事、女王もその気になっていたことから、あれよあれよ言う間に迷い子だったメイルは王家に加えられることとなった。

もつとも、迷い子である以上、異世界の親に送り返すべきという声もあつたが、あいにく、こちらから異世界への干渉は過去一度も行われたことはなく、その方法もなかった。

メイルの出自についてフレールから説明を受けたミルアは「そうでしたか」と頷いた。

そして、何が愉快なのか未だ「あっはっは」と笑いながら、腰に手を当てふんぞり返るメイルを見つつ、

「王家に・・・ふさわしい？」

首をかしげそう呟いた。

白く小さな騎士 (後編) (後書き)

ミルア「ミルアと」

メール「メールの」

ミルア&メール「お助け座談会〜！」

ミルア「・・・帰ってもいいですか？」

メール「またんかコラ。おぬし以前にも同じこと言ってなかったか」

ミルア「なんで知ってるんですか」

メール「いや、電波が」

ミルア「ああ、そうですか。いきなりそこまで壊れましたか」

メール「ちょっとまで、おぬし此処だと容赦ないな」

ミルア「過去からの教訓です。ここでは皆さんはっちゃけるので、こちらも少々荒っぽく行かないと飲み込まれそうなので」

メール「そ、そうか。では早速、ミルアよ、おぬし歳はいくつじや  
？」

ミルア「・・・(指折り数え始め)さあ？」

メイル「すまん、私が悪かった。歳はもういい。そうそう、ミルアよ恋はしたことあるか？」

ミルア「恋？ さあ、そのあたりはよくわかりません」

メイル「おぬし、よく人から変な奴とか言われなかったか？」

ミルア「はい。割とよく」

メイル「そうかそうか（これはなんとも面白い拾い物したのう）」

ミルア「メイル様、笑顔が邪悪ですよ」

メイル「おお、いかんいかん。さて今回はこのへんにして、それでは！」

ミルア「みなさん、また次回 ノシ」

メイル「そういえば、おぬし昨日、やめるタヌキ、とか寝言いつてたぞ？ タヌキって？」

ミルア「気にしないでください。昔の嫌な記憶です（汗）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2689s/>

---

SAVIOUR ~ 運命の来訪者 ~

2011年4月29日18時09分発行